

「常陸名所図屏風」に描かれた景観とその表現意識
—近世名所図屏風の系譜に照らして—

猪岡 萌菜 千葉大学

本発表は、新出の「常陸名所図屏風」(個人蔵、岩手県奥州市寄託)について、主題と画面構成を分析し、その表現意識を明らかにした上で、近世名所図屏風の系譜に照らして美術史上の意義を検証することを目的としている。

六曲一双、絹本着色の中屏風である「常陸名所図屏風」は、太平洋側から見た常陸国と下総国の一部の景観を描いており、景観年代は17世紀の末頃とみられる。今日も観光名所として賑わう袋田の滝や、東廻海運の要衝であった那珂湊、鹿島神宮等が描かれているが、一双を左右に並べた画面を斜めに分断するように金雲がかけられており、金雲の奥(画面上部)には離れた場所に位置する内陸部の景観が配される。一方、金雲の手前(画面下部)には常陸国の沿岸部がひと続きの景観として描かれている。この沿岸部には、主に東北諸藩の米を江戸へ廻送した東廻海運の主要な河岸と港がもれなく描かれており、その中継地であった那珂湊には巨大な廻船が複数停泊する等、それぞれの港や河岸の機能や特性を理解し、その実情を踏まえて描かれていることが特筆される。さらに金雲は決して海運の航路を隠すことなく、また難所には波しぶきや渦が表現されるとともに、航海のランドマークになり得たような岩や島が細部まで描かれている点が特徴となっている。このような描写の背景には、海運の航路とそれに関わる事物を丹念に描こうとする表現意識が存在している。さらに、航行中の廻船はいずれも西向きに描かれ、江戸方面へ向かう方向性が明確に打ち出されている点も際立つ。

従来、近世の名所図屏風や都市図屏風を扱う研究では、定型化した洛中洛外図や、ナドコロを描いた名所絵、新興都市江戸や各地の大名が治める城下町を描いた作例が主にとりあげられてきた。しかし、本屏風に描かれた景観の多くは、古くから和歌に詠まれてきたような所謂ナドコロとは異なる上に、画面には一国のほぼ全域をカバーするほど広範な景観が収められていながらも、城や城下は一切描かれていない。この点は、為政者のまなざしのもとに、城を中心とした城下や藩領域に限った景観を描いた近世の各地の城下図屏風とは明らかに異なっている。そもそも東国の常陸国を主題とした作例はこれまでに知られておらず、粉本の存在も確認されていない。ゆえに本屏風は、極めて初発性の高い表現意欲に富んだ作例とみることができ、従来の名所絵に向けられていた関心とは異なる需要に応じて新たに制作されたものであると考えることができる。

本発表では、「常陸名所図屏風」に描かれた景観と画面構成から、海運とそれに関わる事物を特に描き出そうとする表現意識が強く読み取れることを指摘し、その伝来をもふまえて注文主/享受者を考察する。併せて本屏風が、近世の名所図屏風の画題の展開、およびその系譜再考に寄与しうる可能性を提示したい。

(いのおか・もえな)